

氏名	牧野 香里
ヨミガナ	マキノ カオリ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第507号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 鳥 一死の傍観者— 〈作品〉 ・Half moon ・わたしの博物誌 ・追憶

#### 論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚 雄二
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	吉村 誠司
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原 幸雄

#### （論文内容の要旨）

私は幼少期の経験から「鳥」に対して特別な感情を抱いてきた。父親による精神的、肉体的暴力により、感情を閉ざし、無力さに苛(さいな)まれていた私に、強い存在として鳥がいた。彼らの無表情さ、翼を持ちその場から飛び去る姿は、自身をトラウマから解放する救世主となった。また鳥のもつ特殊性、聖性が、自身の原体験と不思議な関連を持っていることに気づき、古今東西で神聖視され、死をも超越し傍観する存在に感じられたことで、鳥を描いていきたいと考える強いモチベーションとなった。

もう一つのモチーフとして幼少期に経験した弟との死別がある。本来ならば悲しいはずの出来事が、父からうけたトラウマにより弟の死への憧憬を招いた。しかし潜在的な死への恐怖は拭えずに残り、死という平穏と恐怖の間で葛藤が生じた。そこで鳥の持つ聖性から、自身の純粋な鳥への崇拜と、死をも超越する存在として認識された鳥を結びつけることで、「鳥一死の傍観者—」という現在に続く自身のコンセプトが成立することになった。

絵画化にあたって、ダダからシュールレアリスムの作家、ジョルジョ・デ・キリコ、マックス・エルンスト、ポール・デルヴォーの三人を取り上げ、シュールレアリスムの持つ物語性、夢の危うさ、非現実空間の構成の面白み、可能性を探ることとした。また、アブストラクトの作家として、ジャクソン・ポロック、岡田謙三、フランシス・ベーコンの三人を取り上げる。三人の作品を動と静の抽象画に分け、それぞれの作品の利点、欠点を検証していく。

最終的にはシュールレアリスムの持つ他人の夢に迷い込んだような構成の柔軟性とアブストラクトの持つ構成による抽象概念の表質化、そして自身の課題であるリアリティのある造形性を合わせた新しい表現を探索していく。

#### 第1章 視覚的リアリティ 一鳥一

第1節「鳥への憧憬」では、鳥に対する自身の経験、鳥の特殊性を挙げながら、自作品の表現根拠をより具体的に明示した。

第2節「視覚的リアリティとしてのダダ、シュールレアリスム」では、鳥というモチーフの聖性を絵画化するため、ジョルジョ・デ・キリコ、マックス・エルンスト、ポール・デルヴォーの三人の作品を読み解き、自作品との比較検証を行い、与えられた影響、絵画としての可能性を検証する。

#### 第2章 心理的リアリティ 一死一

第1節「死について」では、小林秀雄の『本居宣長』の記述から、死というもの目に見えないものの捉え

方を検証し、絵画表現の上でさまざまな表現を試み得る土壌としての自らの見解を述べた。

第2節「心理的リアリティとしてのアブストラクト」では、死という可視化できないモチーフをどのように絵画化していくべきか探るため、ジャクソン・ポロック、岡田謙三、フランシス・ベーコンの三人を取り上げアブストラクトの限界と可能性を探った。

### 第3章 提出作品－制作過程－

本章では、提出作品の「Half moon」、「わたしの博物誌」、「追憶」を例に挙げながら、自作品の過程にこそ自身の表現したい、伝えたいものの根源があると考え、表現手法を具体的に明示し、完成までの過程を示した。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、超然と空を飛び、無表情にすべてを傍観するかのような鳥に、特別な感情を抱いてきた筆者のコンセプトと独特な制作過程について論述したものである。

筆者には、父からのせつかんと幼少時の弟との死別が大きなトラウマになっている。翼でその場から飛び去り、表情筋をもたないため無表情で鋭い目つきの鳥は、少時から筆者を解放してくれる憧れの救世主だったという。第1章第1節では、世界的にも聖性を付与されてきた鳥の存在を、国旗や宗教絵画（有翼の天使、迦陵頻伽など）の事例に確認し、第2章第1節では鳥葬に、死を超越する鳥の存在性を見出している。ここまでで、論文タイトルとした「鳥－死の傍観者－」という筆者のコンセプトは、すでに明快といえる。しかしここから実際の作品制作（第3章）にいたるまでの、筆者が共感を感じる他者の作品事例の説明は、いったん鳥から離れた筆者独特のイメージ解釈になっている。

第1章第2節で、筆者が「視覚的リアリティ」を感じる絵画は、ダダやシュールレアリスムであること。具体的には、ジョルジョ・デ・キリコは「現実からの逃避」、マックス・エルンストは「超現実の鳥」、ポール・デルヴォーには「無表情と非合理性」を感じるという。これらは鳥そのものというより、筆者が鳥から感じた属性を、他者の作品に見出だす作業といえる。また第2章第2節では、筆者が死の「心理的リアリティ」を感じる絵画は、アブストラクト絵画であること。具体的には、ジャクソン・ポロックは「死への恐怖」、岡田謙三は「死の超越」、フランシス・ベーコンには「具象と抽象の狭間」を感じるという。とくにフランシス・ベーコンの「具象と抽象の狭間」、「写実への衝動に駆られながら、他方では全く自由な表現を望む」制作姿勢が、筆者が表現したい絵画に最も近いことを確認する。

そして第3章では、提出作品3点について、具象と抽象の狭間を、画面に向き合いながらその都度自由に変えて納得地点をさぐるプロセスを、段階ごとに詳述している。全体としては抽象的畫面の、所々にしのばせた具象モチーフの一つとして鳥がいる。いわば目に見えない死を視覚化するために、刻々と変化する心情と画面を、鳥が静かに見つめる画面になっていると言える。

本論文のコンセプトは明快で、文体も分かりやすい一方、筆者独特のイメージ展開から、実制作へのつながりの部分がやや分かりづらい感もある。しかし論文全体は、リアリティとモチベーションの高い論考となっており、トラウマをのりこえようと格闘する筆者の切実さが窺われる。学位論文として十分な内容、レベルとして審査会の承認を得た。

#### (作品審査結果の要旨)

牧野君は厳しい父に育てられる事により、自分の世界を確立し、自分なりに視点の方向性を導き出し、モチーフによって独自の思いを絵画に投影してきたように思う。

父親の存在からの逃避の為に、画面の中の無表情に見える動物、とりわけ他の世界にすぐにでも移動できる鳥という生き物に憧れモチーフにしてきた。

博士課程に入った頃から、やや抽象的な画面分割構成と力強い表現を試みるようになった。薄茶・黄土を基調に乾いた空気を感じる画面からは、若い現代的な割り切られた表現とあいまいな気持ちをぶつけて、ないまぜとなっているのだと思う。表面的には爽やかな部分があるが、物事を深く探っていこうとする姿勢が

彼の作品の魅力になっている。

「サンサーラ」・・・この作品は彼の修了制作である。この作品から鳥を画面の中で大胆に大きく配置し、自分の気持ちを投影した絵を描くようになった。しかし、整理され、考えぬかれた構成とはいえ、感情が先行している。表面的で綺麗な作画から決別し、モチーフを、制作者の意図で操作して制作することの重要性を確認した作品である。

「November steps」・・・作者曰く、「シュールという効果を狙うあまり、作画行為が先に見えてしまっている、互いに関連のないモチーフを恣意的に配し、それぞれのモチーフの個性が強すぎてモチーフ同士の見え方のやり取りに終始してしまった感がある」と述べている。気持ちが先行し、物の配置が行き当たりばったりになっていて、構成に難がある。作者は自分の絵を冷静に批評しており今後の課題をこなしていける姿勢を感じる。表面的な構成力は、勉強することにより養うことができる。

「私の博物誌」・・・鎌倉芸術祭日本画公募展大賞展にて大賞を受賞した作品である。鷺と草木を平面的に描き、明るい色調で柔らかな表現により、爽やかな印象を与えている。色面も効果的に入り彼の穏やかな世界を表す事に成功している。

「Half moon」・・・鳥を描かず、鳥の目線になって風景を描いた作品である。素材や絵の具の厚み、マチエールなど、色面分割を効果的に配置し一つの画面にまとめ上げた。本人曰く、「素材の扱いと画面の処理に終始してしまい、本来の目的だった言葉にならない感情の表現にまで至らなかった。」としている。確かに、力のこもった作品であるが、バラバラの視点によって作者の意図が解りづらい。分割画面には、マチエールによるおもしろさを表現する為、素材に凝った積極的な仕事を試みている。彼の持つ繊細な感情が、分割画面をソフトにつなげ、新たな彼の世界を模索しているように思える。

「追憶」・・・博士課程最後に描いた作品である。彼自身の鳥や死への思い、トラウマからの脱却を願い追憶というタイトルにしたという。四羽の朱鷺を様々なポーズによって組み合わせ、一つの塊として捉えている。造形的にまとまりのある構成となっており、彼の主張が伝わってくる。色面としての構成により絵画空間を意識して描いたという作画がうまく成り立ち、心地よい画面となっている。

彼の絵は、自分の気持ちに添って深く物事を追求しようとしている画面ではあるが、気持ちが先行し、ややモチーフどうしの必然性に欠けるように思える。また、日本画ということで、平面的な処理に走りすぎ、モチーフの立体感・空気感が乏しくなっている。日本画は、その表現として、写真的な光と影を用いる表現はむいていない。しかし、平面的な処理をしながらも3次元的な世界感を打ち出していくことは、デッサン及び絵画を深く勉強した人にしかできない境地であるといえる。

牧野君の博士課程での創作活動は彼の心情により、独自の方向性と狙いの特異性によってある一定の境地に至った。また、その作品は、外の世界でもいくつかの賞をもらい、院展にも入選を重ね、認められてきている。これは、博士課程を修了するにあたり十分な資格があるといえる。

#### (総合審査結果の要旨)

牧野香里くんは、幼少期にもたらした「死」を想起させる精神的トラウマから当時の記憶を呼び起こし、それを織り交ぜながら閃いた感性を増幅させ、制作の意図を画面に形成させる独自の制作形態を見出した。さらにそこへ彼が崇拝する鳥を配置することによって、翼を広げて自由に空へ飛び立つ鳥の存在が彼にとってのトラウマである「死」をも超越し、傍観する存在へと発展させた。また、それによって自身の幼少期の精神的トラウマからの解放という点を促し、そこから結果的に線や面、及び色調となって画面に構築させるという独自の制作形態をもたらした。

彼の制作の評価すべき点は、記憶や言葉を織り交ぜるような表現方法から生まれる、彼独自の絵画形成方法にある。絵空事から生まれたものではなく、彼自身の幼少期の体験から着想を得たものを言葉にし、詩的に汲み取って画面へと生かしている。さらに興味深いのは、普通作品は完成の予想図を最初にイメージして作っていく工程が妥当であるのに対し、彼はあえて完成の小下図を作らずに制作途中で画面の天地を逆にし、常にプロセスをリセットしながら構図を決めていく画面構築である。それは一種のコラージュにも値する行為であり、彼独自の画面構築プロセスを生み出している。その制作プロセスは、一見すると辛く苦しい傾向

の様にも見受けられるが、その行為によって彼は芸術家の持つ完成までの苦しみと逃げずに向き合おうとしており、それと同時に自身が心地良くなる瞬間＝完成に辿り着く事を待っているかの様にも感じられる。そして、あえて自分をその苦しい立ち位置に置いていることに、制作に対する失敗を恐れない姿勢と、さらにクリエイティブなものを作っていく可能性が感じられる。

彼が作り出した新しい制作概念である記憶や言葉からの画面構成論は、論述として高く評価し、審査員全員の協議の結果、論文研究作品共に学位研究に値すると判断した。今後彼が制作に奮闘していく中で、より彼独自の感性を磨き、さらなるオリジナリティある作品を生み出していく事を大いに期待するものである。